

# 国

# 語

へ注意

- 一 「始め」の合図があるまで、中を開けないで、注意事項をよく読んでください。
- 二 解答用紙は中に折り込まれています。最初に受験番号と氏名を解答用紙の指定欄に記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の指定欄に記入してください。
- 四 字は濃くはつきりとていねいに書いてください。
- 五 字数には、句読点も記号も一字として数えます。
- 六 鉛筆・シャープペン・消しゴム以外は使用できません。
- 七 問題冊子は9ページまであります。
- 八 開始・終了は監督の先生の合図に従ってください。
- 九 早く解き終わっても教室の外には出られません。
- 十 検査終了後、問題冊子は持ち帰ってください。



一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、文中の言葉の下にある「」の中はその言葉の意味とする。

高三の二月の学測〔台湾の大学入試の一種〕で、彼女は良い成績を取り、個人申請入試〔学測の成績に基づく入試〕で台湾大学〔台湾随一の大学〕日文科に合格したが、小雪は思うほど良い点数が取れず、七月の指考〔台湾の大学入試の一種〕を受けることになった。鳳凰木〔台湾では卒業式のある六月に開花する〕が燃え盛る季節になっても、死に物狂いで猛勉強を続ける小雪を見ると、彼女は心が痛んだ。

「迎梅インメイと一緒に杜鵑花城ツツジのしろに入るためだよ。応援してね」

と、小雪が笑いながら彼女に言った。台大は春になると杜鵑花ツツジが咲き乱れることから、杜鵑花城とも呼ばれる。

「うん。晴れた日には椰林大道イェーリンダーダウで自転車を走らせ、雨の日には総図書館ズエンジュエーフーに引き籠こもろう。月が出ていれば酔月湖ズエーユエーフーで月見をし、出でなければ温州街ウエンジーヨージェーで散歩をしよう」

彼女はたしかそんなことを言ったはずだ。潮騒しおさいのように雪崩なだれてくる蟬せみの声。小雪の笑い声もまた、蟬せみの声のようにスんでいて耳に心地よく、湿った薫風くんぷうに運ばれ晴れ渡る空の向こうに溶け込んで消えた。

指考の最終日、彼女は試験会場の外で小雪を待っていた。会場の教室内ではエアコンが効いているが、外はそうも行かない。真夏の曇りの日には烈日が猛威を振るう場こそ無いものの、暗い対流雲が低く空に立ち籠めていて、晴れの日よりも一層蒸し暑い。いつそ雨が降った方が気持ち良いだろうにと、彼女は思った。

試験の最後の教科が終わったのは夕方頃だった。小雪は受験生の群れの間を縫って、手を振りながら彼女に向かって歩いてきた。この試験の結果によって、彼女と小雪がこれからの四年間一緒になるか離れ離れになるかが決まる。そう思うと、彼女は何だかやりきれない気分になった。それに対して、やっと試験が終わった小雪は、重荷から解放されたような微笑ほほえみを浮かべていた。

逢 甲夜市〔夕方から真夜中に営業する屋台、露店、雑貨、売店、移動販売などの集合体〕は台中女中〔バス停の名前〕からバスで一時間もかかるから、普段はあまり行かないが、その日は二人とも何となく夜市で食べ歩きたい気分だったので、行くことにした。帰宅ラッシュのバスは身動きも取れないほど混雑しているが、小雪に手を握られていると彼女は安らぎを感じた。夜市に着いた時にはすっかり夜になっていて、あちこち乱立するネオンの看板が毒々しく光っていた。彼女達は互いの手を繋いで人垣を掻き分けながら、不摂生なB級グルメを頬張った。顔より大きい骨付きの鶏胸肉を丸ごと揚げた鶏排や、糯米の腸詰で豚肉のソーセージを包んだ大腸包小腸。顔についた糯米の粒や油でテカった口元を見つめ合つては、彼女達は笑い合つた。たとえ真夏でも、雪と梅はちゃんと結ばれているなあと、そんな馬鹿げた発想に彼女は陶然としていた。

夜市の中核である文華路を進むと、逢甲大学の正門が見えた。夜市の雑踏と喧騒とは無関係に、夜のキャンパスは静かな闇に包まれていた。歩き疲れて、二人はどちらからともなく、当たり前のようにキャンパスに入ってしまった。大学も夏季休暇に入っていたためか、キャンパス内は人が少ない。暫く歩くと、十四階建てのビルと、その前に広がる芝生が目に入る。芝生の横には一列のガジュマルが並んでおり、樹間にベンチが設置されていた。彼女達は照明のあまり届かないベンチを選んで腰を下ろした。夜市を歩き回っていた時の高揚感が次第に退いた。

「これで高校生活が終わり、か。やっと実感が湧いてきた」

小雪が空を見上げながら言った。空は相変わらず重苦しい雲に覆われていた。

「小雪はそうかもしれないけど、こっちは一か月前にもう卒業したからね」

卒業式は六月だったが、小雪は七月に試験があるから卒業式の後も毎日学校に通って勉強していた。

「迎梅はさあ、まだ死にたいと思ってる？」

⑤ トウトツに小雪がそう聞いた。

「いや、死にたいと思ったことなんて一度も無いよ。少なくとも小雪と出会ってからは。ただ何となく、長生きできないだろうなあと、心のどこかで思ってるだけ」

「なんでそう思うの？」

何故なげだろう。彼女にもはっきり分からない。恐らく丹辰ダンチエン（小五の時に交通事故で死んだクラスメイト）とは無関係ではないだろう。では、レズビアン「女性の同性愛者」であることに関係はあるのか。社会的な雰囲気はもはや九〇年代とは違うにしろ、今でも同性愛者は社会制度から排除されている。普通の人間のように育ち、結婚し、子を授かることができないからこそ、未来に対するイメージがつかめず、それが死への想像に繋がるのだろう。しかし、小雪と付き合う一年半で、彼女はもう十分セクシユアル・マイノリティ「性的少数者」としてのアイデンティティ「自分が何者か認識すること」を確立したはずだ。同性愛は病気ではないことははっきり分かったし、台北では毎年アジア最大規模のプライドパレード「性的少数者のイベント」が開催されていることも知った。大学に入ったら一緒にパレードに出ようと小雪と約束を交わしもした。なのに、もしまだレズビアンでいることに不安⑥を感じているのなら、それはあまりにも小雪に申し訳ないのではないか。

黙り込んだ彼女を見て、小雪は話し続けた。

「迎梅は、大事な人の死を経験したことがあるでしょ？」

そう訊かれて、彼女は少し動揺した。彼女は小雪に丹辰の話をしたことが無い。意図的に隠していたわけではなく、小学生の頃の出来事を敢えて話題に取り上げる必要性を感じなかったただけだ。しかし、誰よりも丁寧に彼女の小説を読んでいた小雪がそれに気付くのは、考えてみれば当たり前のことかもしれない。そんな小雪は大好きだが、時には丸裸にされ、心の隅々まで見透かされている

ような気分になる。

「大丈夫だよ、小雪がいてくれれば、迂闊うかつに死んだりしないよ」

と、彼女は動揺を隠すべく話題を逸そらした。

「じゃ、私がいなければどうなるの？」

「どういう意味？　小雪がいなくなるの？」

「いや、いなくならないよ」

小雪は溜息ためいきを吐いた。「ただ、ずっと迎梅の傍そばにいられるとも限らないの。私は本当に迎梅のことがすごく好きだから、たとえ私がいなくなっても、生きていてくれる？」

改めてそう頼まれると、彼女もつい意地を張ってしまう。

「それは約束できない。小雪がいなくなるの嫌だし、いなくなったら私にそんなことを求める権利も無いでしょ？」

「それは間違いない。迎梅の人生に私がとやかく言う筋合いは無い。でも……」

小雪は少し間を置いて、彼女の方に顔を向けた。驚いたことに、小雪の目は涙ぐんでいた。「聞いて。私、迎梅と同じ大学には入れないと思う」

なるほど、と彼女は思った。小雪はツトめて笑顔を見せようとしていたが、やはり試験が気掛かりなのだ。

小雪は続けた。

「今日の試験、やってしまったの。答えは知ってるはずなのに、いざ選ぶとするとつい考え過ぎて間違ってしまう。そして次の教科の途中でハッと思い出して、それで落ち込んで、結局また同じ過ちを繰り返して……」

それまで抑えていた感情がいよいよ爆発したようで、小雪は啜り泣き始めた。初めて小雪の（⑨）を見た彼女はどうすればいいかわからず、つい狼狽うろたえてしまった。恐る恐る手を伸ばして、小雪の背中をゆつくりと摩さするのが精一杯だった。本当は一つに溶け合うくらいきつく抱き締めてあげたかったが、小雪を刺激するのが怖くてできなかった。

「まだ決まったわけじゃないでしょ？ 案外上手うまに行ったかも。決め付けずに、良い結果になるようにと祈ろうよ」  
十八年間も語彙ごいを蓄積してきたのに、肝心な時にそんな陳腐⑩な言葉しか出てこないことを、彼女は齒痒はがゆく思った。

「無理。受験した本人が一番よく分かっている。奇跡は絶対起きない」

小雪は頭を彼女の肩に凭もたせ掛けた。空気はどことなく暑苦しく、雲は今にも頭に雪崩れてくるように低い。それでも雨は降らない。小雪の瞳から流れ出てくる透明な雫しずくが、彼女の肩を濡ぬらしていった。

「迎梅と離れ離れになりたくない。けど……」<sup>⑪</sup>

彼女も奇跡を信じるほどロマンチストではない。しかしあの時だけは奇跡を渴望していた。

「離れ離れになんてならないよ。台大が駄目でも、台北には他にも良い大学が沢山あるでしょ？ 政治大学はどう？ 文学部も外国語学部もコースがいっぱいあるし、有名な作家や芸術家も沢山出てるよ」

そう言いながら、彼女は自分の言葉に心底失望した。政治大学の文学部にどんなコースがあるかなんて問題ではないはずだ。彼女達が共に描いた未来——春の暖かな陽射ひざしの下で杜鵑花を愛めで、秋の爽やかな風さわに吹かれながら詩を詠み合う、そんな未来だ。一緒に受けた授業が沢山あるし、一緒に回りたい本屋も沢山ある。彼女達はこれまで何度もそんな想像を練り、何度も一緒に台大のシラバス「講義などの内容や進め方を示す計画書」と、大学周辺の独立系書店「店主が店頭に並べる本を選ぶ書店」の情報を調べた。小雪が気にしているのは、自分自身の失敗でそんな未来予想が壊れてしまうということのはずだ。だとすれば、他に掛けるべき言葉

があるのではないか。

しかし、彼女が何かを言う前に、小雪が先に宣言した。

「私、一浪〔二年浪人〕の略。次年度の受験合格を目指して一年間受験勉強をすること」  
「すると思う」

彼女は驚いた。台大に入れなくても、何も浪人をする必要は無いはずだ。

小雪は頭を凭せ掛けたまま、彼女の反応を気にせず、独り言のように話し続けた。

「両親と約束したの。台大に入れなければ浪人するって。両親はどちらも台大出身で、私にも台大に入ってほしいといつも言っている。私も心の中で決めたの。両親の期待に応えて、代わりに迎梅との関係も認めてもらおうって」

⑫ 心がチクリと痛んだ。小雪にそんな考えがあつたなんて、彼女は知らなかった。小雪はいつも凛りんとしていて、我が道を行くように振る舞っているから、家族に性的指向や恋人を認めてもらいたいという願いが小雪にもあることに、彼女は気付いてあげられなかった。願うだけではない。きちんと計画もしていたのだ。

彼女にはそれができなかった。見通しの立たない未来をどこか恐れていて、そんな未来に直面するのをいつか死によって回避することを想像していた。何かにつけて死ひに惹かれ、先のことを虚無視する彼女とは違い、小雪は二人のために将来のことも考えているのだ。ならば、小雪の決めたことに対して、彼女も支持の意を示さないわけにはいかないはずだ。しかし――

「離れたくないよう」

我が儘わがままなのは重々承知だ。もし小雪が本気で浪人したいと決めたのなら、その決定を左右する権利は彼女には無いし、我が儘を言う自分が嫌だった。それでも言わずにはいられなかった。小雪は台中〔台湾中西部の都市〕が実家だから、浪人するとなると台中の予備校に通うことになるだろう。しかし彼女は台北に行く。二百キロの距離は、当時の彼女にとって天と地のように遠く感じられた。



「私だってそうよ」

と、小雪は静かな声で言った。

「でも、両親の期待だけじゃない。私もあの杜鵑花城に入りたいし、迎梅と同じ大学に行きたい。だから……我が儘なのは知ってるけど、一年間待つてほしいの。絶対会いに行くから。その時、二人で邱妙津きゅうみょうしん「台湾の女性小説家」の軌跡たどを辿ろう。酔月湖、汀州路ディンジョール、温州街……悲劇で終わらない『鰐わにの手記』（邱妙津の作品）を、一緒に書こう」

彼女は思わず想像した。やつと再会した二人が、夜の酔月湖ほとりの畔で風に吹かれながら散歩したり、温州街の入り組んだ小道で書店とカフェを探索したり……小雪は何も我が儘を言っているのではない。行きたい大学に入るために、叶かなえたい夢をつかむために努力して、何が悪いのだろうか。

「結局……人生不相見じんせいあいみざること、動如参与商やぐもすればしんしょうのこと「人生では会いたくても会えないことが多い、ときには参星と商星のように隔たってしまう」、か」

また嘆くようなことを言ってしまった。小雪の前ではどうしても甘えてしまう。

「縁起でもないこと言わないで。二十年も離れないよ。無為在岐路なすことなかれきろにありて、儿女共沾巾じじよとじもにきんをうるおすを「やめよう、この岐路に立って女子供のように

涙でハンカチを濡らすようなことは」

⑭「そう言われても、儿女だから仕方無いじゃん」

小雪は彼女の肩から頭を離し、今度は彼女を軽く抱いて、頭なを撫でた。二人はそのまま黙り込んだ。少し離れた所の逢甲夜市の喧騒だけが、遠くで木霊こだましていた。空には星も月も見えなかった。

（李琴峰りことみ「独り舞」による。一部表記・体裁を改めた）

問一、——②「何だかやりきれない気分」とありますが、このときの気持ちの説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 試験さえなければ二人で楽しく過ごせるのという気持ち

イ 自分が先に合格したから彼女に苦労させているという気持ち

ウ 試験で今後の二人の関わり合いが決まるのかという気持ち

エ 合格発表まで待たなければならぬのが面倒だという気持ち

問二、——④「夜市を歩き回っていた時の高揚感」とありますが、これを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

B級グルメを食べては笑い合い、二人の関係の確かさを実感しては  こと。

問三、——⑥「不安を感じている」とありますが、この理由が書かれている部分を解答用紙の言葉に続くように、文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四、——⑧「小雪は啜り泣き始めた」とありますが、この理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から十一字で抜き出して答えなさい。

試験に落ちて  が実現しなくなると考えたから。

問五、（⑨）に入る言葉を文中から抜き出して答えなさい。

問六、——⑪「……」とありますが、ここにあてはまる言葉を文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問七、——⑫「心がチクリと痛んだ」とありますが、この理由を説明した次の文の空欄A、Bにあてはまる言葉をそれぞれ文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

小雪は  して行動していたのに、自分は  して直面するのを回避していたから。

問八、——⑬「叶えたい夢」とありますが、台湾大学に入ること以外で小雪が望んでいることを文中から二十字以上二十五字以内で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問九、——⑭「そう言われても」とありますが、小雪の引用した漢詩の中の「岐路」という言葉は、本文の展開においてどのようなことを指しますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から四字で抜き出して答えなさい。

彼女達が  になること。

問十、この文章の特徴の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 心情を天候の描写に託し、彼女の気持ちを効果的に表現している
- イ 夜市の喧騒の中でも気持ちが晴れない二人の心情を表現している
- ウ 途中に回想場面を挟むことで二人の関係の深刻さを表現している
- エ 受験期の揺れ動く心情を漢詩を用いてわかりやすく表現している

問十一、——①「スんで」、⑤「トウトツ」、⑦「ツトめて」のカタカナを漢字に改め、——③「不撰生」、⑩「陳腐」の漢字の読みを答えなさい。

